

2 0 2 5 年 度

(前 期)

国 語

注 意

1. 受験番号と氏名は、解答用紙の所定の欄に必ず記入しなさい。
2. 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
3. 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。
4. 所定欄以外にはマークしたり、記入したりしてはいけません。
5. この冊子の余白は、下書きに使用してもかまいません。
6. この冊子は全部で 23 ページです。
7. この冊子は持ち帰りなさい。

問題一

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

新型コロナウイルスによるパンデミックや異常気象など、将来に不安を抱かせる状況が続いており、社会を変える動きの一つとして、「脱炭素社会」⁽¹⁾がある。

この内容は、「人間活動が排出している二酸化炭素(CO_2)」があまりにも大量すぎて地球が温暖化し、豪雨や干ばつなどの自然災害が増えている。そこで各国政府や企業が2050年までに二酸化炭素やメタンなど温室効果ガスと呼ばれるガスの排出を『実質ゼロ』にする」というものだ。

米国主催の気候変動サミットで、日本は CO_2 排出を「2030年までに2013年度比46%減」という目標を出した。これまでの「2013年度比26%減」では生ぬるく、この目標設定は妥当だ。

これは、私の専門である「生命誌」が基本に置いている「人間は生きものである」という視点からも評価できる。ただ、これを「脱炭素社会」への動きと呼ぶことには疑問を拭いきれない。

大事なのは、次の世代、そのまた次の世代に地球で幸せに暮らす社会を自信をもって渡すことだ。孫にあたる世代のグレタ・トゥンベリ(スウェーデン)の温暖化防止の努力を求める行動が世界の若者たちを起ち上がらせた。これで思い出したのが、1992「平成4」年、リオデジャネイロでの環境サミットで、日系二世セヴァン・スズキ(カナダ)が行った「大人は子どもにやってはいけなさと教えることをなぜ自分た

ちはやるのですか」と問うスピーチだ。争わない、分かち合う、散らかしたら自分で片づけるなどを子どもに教えながら、自分たちはそれを守らずに地球を壊している大人に抗議をしたのだ。彼女は娘世代だ。それから30年、この問いに応じなかったために、孫に同じことをよりきつい調子で問いただされることになったのだ。今度こそ変わらなければならない。

地球は「生きものの星」。46億年前に太陽系の惑星の一つとして生まれ、 H_2O が水として存在するいわゆるハビタブルゾーンにあったために、38億年ほど前に生命体が誕生した。さまざまな元素の中で生命体の構成分子の骨格は炭素となった(同じような性質をもつ元素がコンピュータに利用される珪素であるのも興味深い課題だがここでは深入りしない)。DNA、RNA、糖、タンパク質など、よくぞこのような物質をうまく使い、みごとに反応を進めたものと感心する他ない。生きものがもつ、柔軟に変化しながら安定というロバストネス⁽²⁾を支えるこれらの物質はすべて炭素を骨格としており、生きものである人間が、生きものの星としての地球の継続を願うなら、炭素に注目し、それでできている生態系を持続させていく他に選択はない。「脱炭素社会」ではなく、炭素を意味ある形で活かし、循環させる暮らし方を考えることが重要であり、それが本当の豊かさにつながる。そこへ向けての挑戦こそ、これから求められることである。

生命活動での反応の最終形が無機化合物である CO_2 だ。自然界での物質循環の中で、 CO_2 は動物の呼吸、微生物による分解、火山活動で発生する。現在問題になっている文明活動での化石燃料の燃焼による CO_2 発生の急速な増加の抑制に「脱炭素」という言葉を使うことで、

生きものである人間の活動を考える時は、常に自然界の炭素の動きを考えていなければならないという基本への眼差しを忘れてはいけない。

循環している炭素が、呼吸や燃焼などでCO₂になるとエネルギー的に安定であり、容易に有機化合物には戻らない。CO₂は炭素化合物としては特殊な存在なのだ。人間は火を用いるようになったからこそ、文化、文明を構築してきたと言える。燃料の炭素化合物は、薪炭から始まった。産業革命以後はまず石炭、次いで石油という数億年、数千万年前の植物など、生物由来の地下資源を利用するようになり、エネルギー大量消費型の社会を形成した。大気の組成に影響して温暖化を引き起こすほど大量のCO₂排出は問題であり、CO₂排出の抑制は当然だ。けれどもそれを「脱炭素」と呼び、炭素から離れるのではなく、炭素についての確な認識をもち、正しい対応をする方向へ動かなければならない。石炭・石油の生成の歴史を考えたら、これを百年という単位の期間で消費し尽くし兼ねない使い方がどれだけ野蠻でホモ・サピエンスの名にそぐわない行為であるかは自明だ。もっと炭素を知り、賢い生き方を探るのが正しい態度だと思う。

ここで植物が持つ、太陽のエネルギーと水を利用して、CO₂をでんぷんという有機炭素化合物にする光合成能が浮かび上がる。生きものの歴史の中で光合成能が生まれ、それが樹木という形で存在することになったからこそ、生きものの世界がこれだけ多様な形で継続し得るのだ。植物から出発して、生きものの生存に必要な炭素化合物はすべて生態系の中でつくる、つまり炭素は循環の中に入るのだ。これを始められるのは光合成だけ、人間はまだこれに匹敵する技術を持っていない。身の回

りで毎日育っていくのがあたりまえの植物の中で、なんともみごとに反応が進んでおり、しかもここで出る副産物が人間にとって不可欠な酸素(O₂)であることを考えると、改めてこの仕組みのみごとさを感じる。

太陽光



光合成は小学校の理科で習い誰もが知っている式だが、これを改めて見ていただきたい。これ以上シンプルにはなりようもないこの反応が、どれだけ大きな意味を持っているか。太陽と水と二酸化炭素。私たちの技術ではこれはできないということを再確認し、技術とは何だろうとも考えたい。

社会活動によるCO₂排出削減は重要課題だが、「脱炭素社会」という言葉にしてしまうと、これからの生き方が見えない。まず自然のしくみをよく知り、それを生かした社会をつくっていくことがこれからの生き方であり、それへの挑戦こそ生きものである人間の選択ではないかと思ふのである。

① もちろん、科学技術も経済も人間の能力を生かしての活動であり重要だが、現在のありようを唯一絶対の能力の生かし方であると考えてよいのだろうか。別の生き方を探るところに、人間らしい力の活かし方があると考えてみる必要があるか。今、強く思う事だ。

② ところが1万年ほど前に農耕を始めて以来の道は、自然を操作する方向へ進み、さらには自然離れをすることを進歩と評価する社会をつくってきたのである。この間の歴史を詳述する余裕はないが、産業革命以後、

とくに20世紀以降の暮らし方は、「人間は生きものであり、自然の一部である」という事実とはかけ離れた特殊なものだった。

③ もちろん、これまでの歴史は大切にしたい。科学技術を含めての知的蓄積を存分に活かし、ただ、現在の価値観にはこだわらず、心豊かに生きる道を探してみたいと思っている。それを許すだけの蓄積があるからこそ、挑戦が出来るのではないかと思うのだ。

④ ホモ・サピエンスが登場したのが20万年前である。アフリカの森での樹上生活を止めて二足歩行を始めたこの生きものは、他の動物とは違う特別な歴史を辿ってきた。道具を用い、集団で暮らし（つまり、共食をし、協力して子育てをし）、思いやりの心の強い仲間としてスタートしたのが人類の生活とされる。20万年のうちの19万年間は狩猟採集生活であり、自然との関わり方は他の動物とそれほど違わなかった。

「脱炭素社会」という言葉で考えている最大のテーマはエネルギーだ。石炭・石油に頼ってきたための二酸化炭素の排出抑制に役立つのが再生可能エネルギーだ（原子力は大きなテーマだが、これもコンピュータと同じく改めて考えることにする）。地球上での生活継続を考えたら、太陽光・風力・水力・地熱など再生可能エネルギーの利用は不可欠であり、国も企業も科学技術者も生活者も、これを重視し始めていることは重要だ。詳述の余裕がないので、最も重要と思う基本を二つだけ考える。

再生可能エネルギーの活用は、これまでの大型化、集中型の社会ではなく、小型化、分散型社会でなければ活かされない。太陽光をはじめ、自然エネルギーは遍在しており、それぞれの土地でそれぞれに合った活用をしなければ意味がない。メガソーラー発電で生じた電気を送電線で

遠くへ送るのは誤用だ。大企業の持つ大規模発電所から各地へ配電するという常識をそのままに太陽光の利用を考えても、うまくいくはずがない。太陽の有効利用は各家庭の洗濯物を日光や風で乾かすのと基本は同じ、ここに技術を導入してより安定した使いやすい形を考えていくことである。エネルギーというとまず電力を考えるのが現代社会だ。高層マンションでの生活では、全自動洗濯機で洗い、乾燥も電気となるだろう。しかし、洗濯物は庭に干して温度と風で水分を蒸発させるといふ原点に戻ってエネルギーの作り方、使い方を考える必要がある。屋根で温水をつくることから考え始めることもできるだろう。生活に密着したところから考えたいという気持ちから日常の話にしたが、その地域の自然特性、歴史、文化を踏まえて、実効性のある技術を用いる社会を意識してのことだ。都会の高層マンションのような閉鎖空間で、どこでも同じに対応でき、スイッチ一つ押せばすべてが動くという生活をよしとするのではなく、自然と向き合い、考え、体を使う生活を楽しむという一人一人が主体的に生きる社会でなければ、再生エネルギーを生かすことは難しい。まず人々の意識、暮らし方の転換あつてのことだ。

エネルギーの専門家にこの意識が欠けているように見える。眼の前でCO₂が排出されない状態をつくることに心を砕き、電気自動車、水素自動車走り回る社会をよしとする。水素社会というかけ声も聞こえる。私たちの身の回りにある水素は通常水であり、CO₂と同じ安定した化合物で、通常の反応では水素は生まれない。製鉄業、ソーダ産業などの副産物として水素が生じるが、社会が動くような量ではなく、水の電気分解によって生じる水素ですべてが動くとは思えない。専門家ではない

者の疑問である。確かに、水素の液化と低温貯蔵についての研究などが進展しているが、地球上での生き方として、水素社会になるのは難しいと感じる。地球という星の生態系の中で生きることと考えたら、自然再生エネルギーを生かし、炭素循環系である生物の持つ能力を活用する暮らしを支える技術開発を徹底的に進めるところから始めることではないだろうか。

イノベーションが必要だ。「脱炭素社会」とは言わず、炭素でできた生きものが豊かで幸せに生きる「炭素社会」を上手に継続させていく技術開発を求めるなら、やはり生きものを含む自然の本質をもっとよく知るという意識が重要だ。自然を機械のように見て、外から操作するのはなく、人間が自然の一部であり生きものであるという事実をもとに、生きものの力を活かす方向へ動く必要がある。まず意識改革であり、一言で表現するなら **A** から **B** への転換である。これは難しいことではない。手を抜いてあなた任せで暮らすことを進歩とせず、自ら考えて生きることを楽しむこと、日常を大切にすることというあたりまえに眼を向けるだけなのだから。³⁸ 38億年も続いていた炭素循環系社会のことも能力を活用し、その中で生きればよいのだから。

社会の仕組み転換には政治・経済・科学技術などの専門家の力が必要だが、生きものとして生きる社会づくりへの方向を決めるのは、生活する人一人一人だ。もちろん政治家も経営者も学者も生活者であることを忘れずに。

（中村桂子『脱炭素社会への疑問——私は炭素でできている』より。原文の一部を省略した。）

問一 傍線部①「脱炭素社会」の説明として、筆者の主張と合致しないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **1**。

① 38億年前に地球上に生命体が誕生して以降、生命体の構成分子の中心は炭素からなっており、「脱炭素」ということばは「生きものの星」としての地球の歴史を踏まえていない。

② 人間の活動による二酸化炭素（CO₂）やメタンなどの温室効果ガスの排出を減らそうという目標は適切ではない。

③ 生物由来の地下資源である石炭や石油の形成には数億年、数千万年もかかるが、これを百年ほどの短期間で消費し尽くしてしまふのは非常に愚かなことである。

④ 「脱炭素」ではなく、むしろ炭素について正しく理解する必要がある。

問二 傍線部②「ロバストネス」の意味として、もっとも適切なものを

次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **2**。

① 突発性 ② 頑健性 ③ 迅速性 ④ 可逆性

問三 傍線部①～④は、本来の順番を変えています。本来の順番に並び替えなさい。解答番号は **3** ～ **6**。

問四 空欄 A と B に入ることばの組み合わせとして、もっとも適切なものを、次の ① ～ ⑥ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 7。

⑥	脱炭素化論	生命論
⑤	脱炭素化論	機械論
④	生命論	脱炭素化論
③	生命論	機械論
②	機械論	生命論
①	機械論	脱炭素化論
	A	B

問五 傍線部(3)「38億年も続いてきた炭素循環系社会」の説明として適切ではないものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 8。

- ① 生きものの生存に必要な炭素化合物はすべて生態系の中で作られる。
- ② 太陽と水と二酸化炭素から炭素化合物と酸素を作り出すという極めてシンプルな反応は、植物によってしか達成できない。
- ③ 現在注目されている「水素社会」は究極の炭素循環系社会を形成しうる。
- ④ それぞれの地域の自然条件や歴史、文化を踏まえて、一人一人が主体的に考えて再生エネルギーを活かしていく必要がある。

問題二

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

感染症は、記録に残るだけでも古代ギリシャ以来、ほとんど人類史とともにあり続けた。ペストやコレラ、チフスやインフルエンザなど、各種の感染症が数世紀ごとに人類を襲っている。そして、ラテンアメリカの一部など、ある一地域の住民がまるごと命を奪われた例はあるものの、全体としての人類が減ぼされたことはない。にもかかわらず、人類は感染症襲撃のたびごとに怯える。理由は明白で、一定数の人間たちが死亡し、それも（おおむね）無差別に命を奪われるからである。こうして感染症は、人類にとって常態であり、かつ種としてそれに慣れることはない。

常態ではあるものの、多くの人が強い恐怖にとらえられ、通常とは異なった対応措置がとられるため、危機的事態は、⁽¹⁾ふだんは意識されない現実を浮かび上がらせる。そして浮かび上がってくるものの多くは、われわれの社会（国内・国際）に足りなかったもの、その歪み、異様さ、脆弱さなどである。

筆者がふだんから対象としている「国際社会」に即して言うなら、それは何より、《境界》というものの不自然さあるいは非機能性にほかならない。^(a)新型コロナウイルスがこの地球の大部分を襲った。ウイルスは国境とは無^aエンだが、それに対抗する人間のほうは国境で区切られた主権の国民国家ごとに対処する。つまり、「ボーダーレス」な脅威に対し「ボーダーフル」な対応をしているのだ。

国家があらゆる点で無用だとか無益だとは言えない。各々の伝統や文化は重要だし、弱小国にとって国家主権はみずからを守る砦たりうるだろう。防疫という問題についても、国家という限られた区域で実施するほうが効率的なこともある。だが、例えばスイスのバーゼルは独仏両国に接し、（感覚的には）市内に両国との国境が何本か存在する。しかもスイスはシェンゲン協定加盟国だから、ふだんはそれらの国境は開放されていて目に見えない。だから、効率的かつ実効的に防疫をしようとすれば、三国が別々の措置をとるのではなく、バーゼルとその周辺に一定の区切りを設定して共同の措置をとるほうが実際のなはずだ。

しかしこの世界はいまなお、まずは⁽²⁾因襲的に行動する。ウイルスがドイツ人もフランス人もなく無差別に攻撃していても、ドイツはドイツ人を守り、フランスはフランス人を守ることから始める。ある意味でそれは、他国の保健管轄権を尊重することでもあるし、自国民は自分たちで守るという責任の^(b)スイ行であるかもしれない。しかし、各国がそれぞれ守りきれればよいが、守りきれない国や十分に守ろうとしない国もある。実際に、そういう不都合が数多く起きるから、境界というものが問題になるのだ。それも感染症だけではなく。戦争がないという意味での「平和」や、人権保障についても同様である。それが実現されるかどうかは、たまたまどの国境線の内側で生まれたか／住んでいるかに依存しているのだ。

ちなみに、ドイツやスイスは、自国の対処に余裕ができるとすぐに、周辺諸国の重症患者を受け入れ始めた。しかし一般的には、境界は障害として存在する。そのように見えにくい（地域によっては全く見えなくなっ

ている)ものが、危機の時にはあつさりと姿を現し、見えるようになる。であるなら、危機はまた、そうして顕在化した社会問題克服の好機でもあるだろう。

1 筋違いだと言われるかもしれないが、この危機に対して国際法は何らかの役に立っているだろうか、としきりに考え続けてきた。割り切りの激しい国際法学者ならば、感染症などそもそも国際法とは無関係だと切って捨てるだろう。だが、ことは世界全体の安寧の問題であり、国際秩序の存亡にも関わる事柄である。もつと具体的に「法的な」問題を見たいと言うなら、国境が閉鎖され人や物の流通が妨げられている事態を見さえすればよい。

2 そうすると、そのように国境の閉鎖自体が国際法に従って行われているのであり、国際法が働いていることの証しだという答が返ってくるだろう。そのとおりである。そしてそれが筆者の自問自答への答にもなる。すなわち、この危機の解決に国際法は全く役に立っていない、ということである。

3 それだけではない。このような地球的危機にあつて国際法は根元で^{ねもと(c)}固に機能している、ということも付け加えておく必要がある。つまり主権的国民国家という存在、そしてそれらが織りなす主権的国民国家体系というものが、まさしく国際法によって保障された「法的な」秩序なのだ。しかもそれは、経済力に基づく国際経済秩序(あるいは無秩序)、各国軍備や軍事同盟によって形作られる国際軍事秩序(あるいは無秩序)も、すべて主権的国民国家という存在が法的に担保されていることに基礎を置いている。

4 「主権」概念も「国民」という存在も、それぞれに意義を持ちうることはさきに述べた。だが、それらを脇に置くならば、国境を超える危機において国際法が果たしている役割は、世界を機能的ではない理由に基づいて分断し、いくつもの点で危機の克服を阻害している、ということに尽きる。

5 言い換えれば世界は、各国がロックダウンするはるかに以前からすでに、法によって二〇〇ほどの単位に分け隔てられているのだ。筆者はこれを世界隔離(Global Quarantine)の構造と呼ぶ。その隔離が人類の努力の積み重ねによって、友好国の間では次第に厳しさをやわらげる一方で、非友好国の間では閉ざしたままで咎められることもない。そして世界的危機ともなると、あたかも当然のように姿を現し、国々をそれぞれの《管轄権の箱》の中に押し込める。それが感染症の拡散防止のために最も合理的な境界であるという保証はどこにもない。

6 いや、国々は隔離されたままではない、それらを結びつなく国際機構というものが、これも国際法の産物として厳然と存在するではないか、という見立てもありうるだろう。今回の危機に関しては、とりわけ世界保健機関(WHO)がそのような存在である。しかし、これまで世界の保健衛生についていくつも功績をあげた国際機構だが、今回の危機では(これまでのところ)感染の世界的拡大と深刻化を防ぐ盾の役割を果たしたとは言いがたい。武漢で発症が初確認された時に単なる中国賞讃だけで終わったこと、事態が悪化するのをよそにパンデミックへの注意^(d)を遅らせたこと等々、機構の対処の真剣さおよび適切さを疑わせる対応がいくつもの段階であつた。

第二次世界大戦以後の国際機構においてさえ、根源的な権力としての主権国家はしっかりと保たれている。

国際秩序の分断性を生み出すのは国際法だけではない。ウイルスと同じく国境を超える事象の一つにいわゆる「グローバル化」がある。それを事象と呼び現象と呼ぶないのは、ウイルスと違って自然現象ではなく人為だからである。しかし、この超国境事象もまた、いくつもの問題を生み出してきた。そしてそれは、一方では人の交流や物流の活発化、あるいは一部途上国の経済発展助長など積極面もあるものの、他方で個別国家では規制しきれない巨大経済活動と、それに比例した巨大環境破壊を伴っていた。逆説的に、そうした経済のグローバル化は、そこで生み出された富もグローバルに均霑するわけではなく、いずれは勝ち組国家を潤し、負け組国家を貧窮化する。勝ち組国家の中にはかつて貧しい途上国だった国も含まれるだろう。また、貧窮国家の中から少数の起業家が飛び出してくるのを後押しすることもある。しかし世界全体を見ると、総人口の七割以上は一日一・九国際ドル（二〇一二年平価）以下の「絶対貧困」状態にあるのだ。経済の「グローバル化」は、控えめに言っても、経済的安寧の世界化ではない。

ここで問うておきたいのは、こういう経済的グローバル化の背後にあるネオ・リベリズム（あるいは世界大の自由放任主義）の意味である。それもまた、新たな境界と隔離を設定するものだった。つまり、経済的弱者を経済的強者から隔離する構造である。リアリズムの立場からは、「それが現実である」という言説を以て肯定されるのだろう。しかしそれが「現実」であると言って済ますことができるのは、経済的強者だけ

でしかない。その点で、このような「現実」が「不変の現実」であるという認識や言説は、根本においてイデオロギーである。

そこで、グローバル化に対しても、国際法に対するのと同じ問いを提起できよう。すなわち、この境界なきグローバル化は、境界なきウイルスの攻撃に対していかなる対抗力を持っていたのか？ ネオ・リベリズムはウイルスに対して有効に働きたか？ いまのところ、肯定的な答は見つからない。むしろ、徐々に医療物資や食糧が国境を超えて流通し始め、ある種のグローバル化が効果を発揮することはあるだろう。だがそれは一時の協力に過ぎないし、そもそもネオ・リベリズムおよび経済グローバル化の教義に従って行われることではないのだ。

だが、問題はそれにとどまらない。経済のグローバル化が役に立たない局面があり、ネオ・リベリズムがこのウイルス危機において沈黙するしかなくとも、権力肯定的という意味でのリアリズムは、寄生物質によって引き起こされたこの危機の中で、まさしくその危機に寄生するかのように、国家権力の肯定という形をとって立ち現れる。国家主義がネオ・リベリズムの片割れであることは言うまでもない。

世界じゅうの国がそうであったようにには思われないが、少なくとも日本では、危機への対処として強力な国家統制を求める声が随所で聞かれた。そもそもは政府の説明が不十分で、科学的根拠のない場合が多く、かつ対処がいつも唐突で遅過ぎ少な過ぎたことが^(e)「ケイ機」ではある。注意すべきは、それが政府批判であると同時に、国家待望論でもあることである。緊急事態宣言が発令されぬことに苛立った⁽³⁾テレビ評論家が、「国家が命令しなければ国民は動かないのだ」⁽⁴⁾と⁽⁴⁾うそぶくのを聞き、暗澹た

る気持ちになった。たしかにこれは危機だし、われわれが自分自身の課題として立ち向かわなければならぬ。だがわれわれは、国家に命令されなければそうすることができないのか。

具体的に何をするかではなく、まず政府に大号令を出してもらうことを求めるかのような風潮も気になった。ウイルスの性質を考えると、ときには外出自粛や活動制限など、一定の強い措置を政府が取るべき場合がある。だがそれとでも、「まず大号令を」から始めねばならないというものではない。科学的に、つまり疫学的・医学的・公衆衛生学的に何が必要か、それに基づいて意思決定されることが何より必要なのだ。（最上敏樹「世界隔離を終えるとき」、村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる——私たちの提言』より。原文の一部を省略した。）

（注１）均霑：平等に恩恵や利益をあたえること。

問一 傍線部(a)～(e)のカタカナの表記部分と、同じ漢字を含む語を、次の①～④のうちから一つずつ選びなさい。解答番号は 9

の ① ～ ④ のうちから一つずつ選びなさい。解答番号は 9

(a) 無エン 9

① エン助を求める

② 健康体には亜エンが必須である

③ エン故で入社する

④ 彼らは犬エンの仲である

(b) スイ行 10

① 計画をスイ進する

② 市役所でスイ納係を務める

③ 窃盗の既スイで起訴される

④ 麻スイを打つ

(c) ケン固 11

① 債ケンを購入する

② 複数の役職をケン務する

③ 文ケンを調べる

④ ケン実なふるまいをする

(d) カン起 12

① 証人を法廷に召カンする

② 文章に深くカン銘する

③ 部品を無償で交カンする

④ 難民が出身国に帰カンする

(e) ケイ機 13

① ケイ約を締結する

② 天からのケイ示を受ける

③ ケイ費を支弁する

④ ケイ算をする

問二 傍線部(1)「ふだんは意識されない現実」の説明として、もっとも

適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

14。

- ① 国々の伝統や文化の重要性
- ② 弱小国にとっての国家主権の脆弱性
- ③ 感染症の常態性
- ④ 境界の不自然性または非機能的性格
- ⑤ グローバル化による富の拡大化

問三 傍線部(2)「因襲的に行動する」の説明として、もっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

15。

- ① 前例にとらわれず行動する
- ② 伝統に固執しつつ行動する
- ③ 攻撃的に行動する
- ④ 慎重に行動する
- ⑤ 突発的に行動する

問四 1 から 7 の段落を通じて、一つの見出しをつけるとして、

もっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 16。

- ① パンデミックと世界
- ② 世界拡散構造としての主権国家体制
- ③ 世界隔離構造としての主権国家体制
- ④ 危機における国際法の貢献
- ⑤ 世界危機と国際組織

問五 傍線部(3)「うそぶく」の意味として、もっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

17。

- ① それが正しいと豪語すること
- ② それは困難であるということ
- ③ 詳細に陳述すること
- ④ あれこれと宣伝すること
- ⑤ 緻密に反証すること

問六 傍線部(4)「暗澹^{あんたん}たる気持ち」になぜ著者はなったのか、その理由

として、もつとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 18。

① 境界なきウイルスの攻撃という危機に対しては、何よりも、国家による命令が必要なのであり、そのような観点に立てば、一刻も早く緊急事態宣言が発令されるべきだったのに、それが遅きに失したから。

② 境界なきウイルスの攻撃という危機に対しては、グローバル化が確かに一時的な効果をもたらした一方で、ネオ・リベラリズム的な信念が各国間の協力を削ぐ効果をもたらしたから。

③ 境界なきウイルスの攻撃という危機に対する日本政府の説明が不十分で、それも科学的根拠がないことが多く、かつ対処がいづも唐突で遅過ぎ、さらに少な過ぎたから。

④ 境界なきウイルスの攻撃という危機に対して、国際法が連綿と保護してきた主権的国民国家体制がある程度は効果を有したにもかかわらず、諸国は境界の重要性を看過し、ロックダウン措置を十分に導入しなかったから。

⑤ 境界なきウイルスの攻撃という危機に対しては、科学的（疫学的・医学的・公衆衛生的）に何が必要か、このような視点から対処すべきであり、政府に大号令を求めるなど不要であるから。

問題三

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

(注¹)

(注²)

脳の信号伝達は確率的であり、しかもその確率はニューロン集団の同期発火がゆらぐことで刻一刻と変動している。わたしたちの脳は、常にそのような状態で毎日働いているらしい。そうであれば、時には信号の伝達がうまくいかず、まちがいが起きてしまうのは当然であろう。どんなに頑張ってもまちがってしまうこと、そして、「集中しろ」「気合を入れろ」「緊張しろ」と呼びかけるだけの精神論がほとんど無力であることも、きわめて当然である。大事なことは、ヒューマンエラーの専門家たちが述べているように、まちがいは必ず起こるということを前提にして、それを減らすための具体的な工夫をすることである。

実はこの「工夫をすること」、つまり新たなアイデアの創出に、まちがえることが大いに関係している可能性がある。コンピュータでは、ある問題の入力に対し、プログラムにより確実な信号伝達と情報処理が行われるため、正解のみが出力される（もちろん、プログラムがまちがっていればエラーが出力される）。入力→処理→出力の関係は一義的に決まってお

り、**A**な出力はあり得ない。しかし脳では、ある問題が入力されたとき、信号の伝達と処理は確率的である。膨大な数のニューロンがつながった神経回路のどこに信号が伝わるかは一義的に決まっていない。もちろん、ニューロン集団による同期発火が働いたため、まったくランダムに信号が伝わるわけではなく、正確に神経回路を伝わり正解を出力することが多い。だからわたしたちは、ほぼ無難に毎日を過ごすことができ

る。

しかし、ニューロン集団の同期発火も常に自発的にゆらぎ変動しているため、ときどき信号がきちんと伝わらなかったり、**A**な神経回路を通ったりすることがあり、ある確率で予期せぬエラーが出力される。つまり、脳はある確率で**A**性のある答を出すようになっていく。それらの多くがエラーとなるのであろうが、今までになかった有用な答、つまり斬新なアイデアや発想が出力される可能性もあるにちがいない。なぜなら、たとえほとんどがエラーとなっても、たくさん多様な答を出さなければ、斬新なアイデアや発想も出てこないことを、わたしたち自身も、また発明王やアイデアマンと呼ばれている人たちも、実感してきたからである。

発明といえば必ずトーマス・エジソンの名が挙がる。その生涯で2186件の特許を残した（ちなみに現在の特許取得件数のギネス記録は、半導体エネルギー研究所代表の山崎舜平氏がつ1万1353件である）。同時に、多くの格言も残しており、失敗にまつわるものも多い。「わたしは失敗したことがない。ただ、1万通りの、うまくいかない方法を見つけただけだ」は有名であるが、他にも「わたしは決して失望などしない。なぜなら、どんな失敗も新たな一歩となるからだ」「それは失敗じゃなくて、その方法ではうまくいかないことがわかったんだから成功なんだよ」「失敗したわけではない。それを誤りだといっではいけない。勉強したのだといったまえ」などもあり、少し長いが「わたしの発明はすべてそうだった。第一歩は直感だ――まず、ぱっとひらめき、それから数々の難問が浮かび上がってくる。何かがうまくいなくなり、次に、また別

の問題が起こる。バグだ。その手の小さな欠陥や難点は、そう呼ばれている」というものもある。

エジソンは典型的な理数系の天才であるが、理数系以外には学習障がいを示し、特に言語能力が低く、失語症の症状さえ示していたという。そのため上記の格言も、本人がいったことを正確に再現しているかどうかはわからないが、どれも内容はほぼ同じである。要するに、多くの失敗、つまりエラーの中から発明が生まれるということらしい。このことは、「失敗は成功のもと」や「失敗は成功の母」という有名な格言もあることから、わたしたちの社会では、きわめて当然のこととして広く受け入れられているが、脳の信号伝達の実態から見ても、きわめて当然といえる。脳の信号伝達は不確定で確率的であるため、必ずまちがいの起こるが、多くのまちがいのの中から、斬新なアイデアつまり創造も生まれるということである。

このような脳が創造を生むプロセスは、生物の進化のプロセスと似ているかもしれない。生物の進化は、親から子へ伝わる遺伝子のコピーミスの結果、それまでにない形質（突然変異）が子孫に現れることから始まる。そのような遺伝子のコピーミスは偶然起こるものであるが、自然界では、ある程度の確率で必ず生じる。そしてコピーミスから生じた突然変異をもつ個体のほとんどは、生物の適応という点ではエラーとなり、環境に適応できず消失してしまう。しかし、稀に環境への適応力がより優れている個体が現れることがあり、この個体がさらに子孫を増やしていくことで進化が起こる。つまり、進化とは偶然の結果にすぎないが、その偶然が起こるためには、生存できず消えてしまう多くの突然変異が

必要なのである。

なお、ヒトが創造性を生むための仕組みを、このような進化のプロセスになぞらえた「進化思考」という考え方がある。つまり、突然変異の良し悪しは、最初はわからず、ほとんどは単なるエラーとなり消えていくが、時として生存に有利な個体も生み出すという事実から、アイデアの良し悪しも最初はわからないが、偶然に任せエラーとなる覚悟でどんどん出していくと、時としてヒットするアイデアが出てくるという考え方である。⁽²⁾ 脳の信号伝達の実態は、この考え方を支持している。

もちろん、脳の信号伝達について何も知らなくても、「失敗は成功のもと」であることは多くの人が知っている。しかし、⁽³⁾ この当然のことが教育現場で実践されているかという点、残念ながら心もとない。成長期の小・中・高校生たちに試行錯誤させながら、つまりさまざま失敗を許しながら斬新な発想を出させるような余裕が、学校現場では失われているように思える。特に都市部では、多くの子どもたちが小学生の頃から学校と塾のダブルスクールに通っており、その目的はたった一つ、受験対策である。難解な問題にできるだけ早く正解するための訓練を、毎日夜遅くまで繰り返している。それが大学入試まで、長い場合は10年以上も続く。「与えられた指示に従いできるだけ早く正解を出す」という訓練を長年受けてきた若い人たちに、いきなり「まちがってもよいから独自の考えを出せ」といっても、たしかに難しいであろう。

事実、筆者を含め多くの大学教員が実感しているであろうが、授業中、あるいは授業後に、自ら質問したり意見を述べたりする学生はきわめて少ない。こちらから意見をいわせようとしても、沈黙するか、当たり障

りのない発言しか返ってこないことが多い。以前、「ハーバード白熱教室」という番組に触発されてだったように思うが、国内の大学でも学生に次々マイクを渡して発言させている授業をテレビで観たことがあるが、マイクを渡された学生たちの迷惑そうな表情やこわばった顔が印象的であった。その表情から、まちがうことを非常に恐れている様子が見て取れた。このような傾向はいわゆる有名大学でも同じくあり、筆者が20年近く勤めた京都大学でも、学生が質問したり意見をいうことは大変少なかった（筆者の授業がつまらなかったことが一番の理由かもしれないが）。そのような学生たちを見ていると、二十歳前後で早くも「B」という感じがしてならなかった。もちろん、学生たち自身に責任があるわけではない。常に指示を与え、無駄なことはさせず、効率的に勉強することだけを求めてきた教育環境に責任があることはいうまでもない。最近の学生は「指示待ち」が多いと嘆く大学教員が多いが、長年にわたりそのように教育されてきた結果であることを理解してあげるべきである。

せめて大学ではゆとりをもたせ、多くの失敗を許容する環境を与えてもよいと思うが、⁽⁴⁾大学も最近はすっかり「真面目」になってしまった。学生ごとにGPAという成績の平均値を出し、まるで高校のように順位をつけている大学も多い。アメリカの大学は厳しく、学生も真面目に勉強しているということで、それを見習いGPAなどの制度を導入しているらしい。しかし、あのように暴力と犯罪が蔓延し、世界でも断トツの超格差社会をつくってきたアメリカの大学教育がそんなに素晴らしいのか、大いに疑問である。入学後も成績の順位に翻弄され、早くも3年目から就職活動に奔走している学生たちを見ていると、本当に気の毒でな

らない。

ちなみに、毎週1回講義に行っていた私立大学は、たしかに有名大学ではあったが、受験勉強だけで入ってくる学生ばかりではなく、多様な入試により多様な学生が入っていた。毎回、授業が終わると、すぐに何人も学生が前に走り寄ってきて、次々と質問したり自分の考えを述べたりしてくれた。それらはけっこの外れでまちがっていることも多かったが、そのまちがいを恐れない積極的で元氣な姿勢は非常に好ましかった。また、自分の授業が（多分）それほどつまらないわけでもないという自信も与えてくれて、大変ありがたかった。今でもその頃の学生たちには感謝している。

（櫻井芳雄『まちがえる脳』より。原文の一部を省略した。）

（注1） 脳の信号伝達：脳は多数の神経細胞（ニューロン）から構成されており、神経細胞の間で電気信号が伝達されることで、感覚や感情などのこころの働きが生まれる。

（注2） 同期発火：神経細胞の電気信号が脈打つように発生することを発火と呼び、多数の神経細胞が同時に発火することを同期発火と呼んでいる。

問一 傍線部(1)「精神論がほとんど無力である」という理由として、

もっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 19。

① 脳の信号伝達は確率的だから。

② 「集中しろ」「気合を入れろ」と呼びかけることがエラーにつながるから。

③ わたしたちの脳は精神論とは無関係に働いているから。

④ 間違いを起こさないためには具体的な工夫が必要だから。

⑤ 間違えることがアイデアの創出につながるから。

問二 空欄 A にあてはまることばを次の①～⑤のうちから一

つ選びなさい。解答番号は 20。

① 特殊 ② 不確実 ③ 多様 ④ 意外 ⑤ 複雑

問三 傍線部(2)「脳の信号伝達の実態は、この考え方を支持している」

ことの説明として、もっとも適切なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21。

① 脳の信号がある確率でエラーを起こすことで有用な答えが生まれる。

② 創造が生まれるプロセスは、遺伝子によって親から子が生まれるプロセスと似ている。

③ 膨大な数のニューロンが同期発火を生むのでたくさんのアイデアが生まれる。

④ 偶然のコピーミスを繰り返すことで、環境への適応力が優れた個体が現れる。

⑤ 斬新なアイデアを求めて、偶然に任せてアイデアをどんどん出す。

問四 傍線部(3)「この当然のことが教育現場で実践されているかという
と、残念ながら心もとない」という著者の心情を表す記述として
もっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。
解答番号は22。

- ① 学校と塾のダブルスクールに通っている子どもたちの負担を心配している。
- ② 難解な問題に正解することは成功体験にしかないことを憂いている。
- ③ 失敗やまちがいを恐れない教育ができていないことを遺憾に思っている。
- ④ 学生が質問をしたり意見を述べたりする機会を十分与えているが不安を覚えている。
- ⑤ 「ハーバード白熱教室」を真似た結果、迷惑そうな表情やこわばった顔をする学生を蔑んでいる。

問五 空欄Bにあてはまる語句を次の①～⑤のうちから一つ
選びなさい。解答番号は23。

- ① 歳をとっている
- ② 世間ずれしている
- ③ 日和っている
- ④ 達観している
- ⑤ 守りに入っている

問六 傍線部(4)「大学も最近はずっかり「真面目」になってしまった」
に込められた著者の考えとしてもっとも適切なものを、次の①～
⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は24。

- ① 長年効率性を求める教育をしてきた結果を受け入れている。
- ② 最近の学生は「指示待ち」が多いことを嘆いている。
- ③ 成績を重視する姿勢に対して皮肉を込めている。
- ④ アメリカの大学の厳しさに対抗する意識を示している。
- ⑤ アメリカの学生の真面目さとの類似性を強調している。

問題四

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

家族主義の究極的な願いは、子孫が富み、栄えること（発家致富）である。子孫が経済的に繁栄して、社会的上昇を遂げ、そしてできれば「官」となることを期待する。役人との接触は極力避けたがるのに、自分の家から役人を出すことは喜ばしいことなのである。

実際に子孫が繁栄するかどうか、ここには墓の「風水」の良し悪しが大きくかわっている、と考えられている。「血の流れ」を重視する家族主義と、「氣の流れ」に基づく風水とは基本的に同型であり、お互い、非常に親和的である。

万一、男児が生まれないなどの事情により、血の流れが途切れそうになると、男系の血縁関係にある子供、たとえば兄弟の息子を一人、養子として迎え入れる。このように、⁽¹⁾「血の流れを絶やさない」ことにたいする執念は非常に強い。「親不孝な行いには三つあるが、男子の子孫を残さないのが一番悪い」（不孝有三、無後為大）という考え方は普遍的である。

ある中国人留学生に聞いた話である。彼女の母方祖母の弟は山西省東南部の農村で村党支部委員会の書記を長く務めた人である。**A**、あるタイミングで書記を続けることを断念した。その理由は、彼には娘が二人いるだけで、男児を授かることができなかったからだという。つまり、男児がおらず、自分の血筋が絶えてしまうことは、彼の村書記としての「威信」にかかわること、自らその職を辞すことを決断させるほ

どの重大事だったのである。

B、中国農村の多くの地域では、「一人っ子政策」の時代にあっても、第二子までは「計画内出産」で、罰金の対象にはならないのが普通だった。が、二人とも女児で、どうしても男児がほしいために罰金覚悟で第三子を産む場合も多かった。当該の村支部書記は、自身が幹部であるので、国家の政策に違反して第三子をもうけることを躊躇したのだろう。

血の流れを絶やさないこと、そして現世における家の発展を期待する家族主義では、**C**、子供にたいする親の期待は非常に大きくなる。

D、農村の経済が発展し「発家致富」が現実的に可能となり、今まで以上に、次世代に多くの教育投資を行うことが可能となった現在では、子世代への期待はさらに強まる。

「子世代への期待」を示す事例は無数にあるだろうが、筆者の記憶からは、山東省果村に住む「池老板」のことが思い出される。中国語の「老板」^{ラオバン}という言葉は、経営者一般のことを指す。大会社でもよいし、家族単位の自営業でも構わないが、自分の意思で経営を切り盛りするトップのことを指す。

リングやブドウなど果物栽培を中心とする村で、池老板は大々的に農園を経営し、羽振りがよかった。果物の買い付けにくる流通業者などとも付き合いがあり、いろんな人を交えて、自宅や村の食堂で頻繁に宴会が開かれていた。そんな彼を冗談っぽく、親しみを込めて「池老板」と呼んでいた。

2011年5月の訪問の際も自宅に呼ばれた。宴会の開始を待ってい

たときのこと。

池老板が、珍しく、少し気落ちしたようにため息をつきながら、一通の手紙を筆者に見せてくれた。それは彼の息子が父親に宛てたもの。前年度の大学入試の成績が思わしくなく、1年間の浪人を決意するまでに至る心の軌跡を記した長文の手紙であった。息子は高級中学（日本の高校に相当）に入学後、学業成績が振るわず、学年で下から十数番目と、低迷していたという。

「僕の成績をみたときの、お父さんの目をふつとよぎった失望の光が忘れられません……」というフレーズもあった。

父親を失望させてきたことにたいする申し訳なさ、自らの不甲斐なさにたいする謝罪とともに、父親から大きな心理的圧力を受けてきたことも告白している。孔子の出身地でもある山東省は、儒教的伝統が色濃く残っているといわれる。老板の息子の手紙の筆致からは、子の親にたいする「孝」の意識が感じられなくもない。

こうして家族主義は、「木の根っこ」のような血の流れを重視するがゆえに、その流れの末端に位置する、現に生きている家族メンバーに、子孫繁栄、「発家致富」の期待をかけ、さまざまな形で心理的作用を及ぼす。

「同じ血が流れている」という意識は、もちろん日本でもそれなりに重いものだ。しかし、家族が伝統的に経営体であり、竹型の入れ物であった日本では、「親子」であっても、そもそも血がつながっていない場合もしばしばあった。血がつながっていても、「子供には子供の人生がある」というように、子供が自分とは別人格であることを受け入れや

すい素地があるように思う。少なくとも本人の意思を尊重する傾向はある。未婚や子供をもたない選択につき、親の世代が必ずしも心理的圧力をかけないのは、本書でいうところの「家族主義」が日本では存在しないからである。家業の経営にかかわらない次男や三男であれば、なおさら「自由」である。

中国（特に農村）では、血の流れが意識されるために、親と子供が肉体的にも、人格的にも切り離されていない。自分の子供のことを「自分の肉の一欠片」（自己身上的一塊肉）と表現する場合もある。子供にたいし、決して「自由に、自分らしく生きてほしい」とは考えない。子孫繁栄、そして「発家致富」の期待をかけるだろう。男女を問わず、少なくとも結婚しないという選択はありえない。

それでは、中国の農民が、地縁や共同体重視の日本と違って、血縁重視の家族主義になったのはなぜだろうか？

一つは、中国が長期的に、非常に流動性の高い社会であったことである。つまり、地縁的なつながりは恒久的ではなかった。安定的な地縁関係が失われた最後の最後に、それでも信頼に足るものとして、空間を超えてつながる根拠として、血縁が重視されるに至った。そのような事情があろう。

とりわけ、殷、周、春秋戦国、秦、漢に至るまでの古代中華文明の舞台であったのは、地形の真つ平らな華北平原である。「中原」と呼ばれる地域であり、戦乱が起これば、身を隠すような山岳地帯もない。命からがら身一つで逃げまどうような極限状況で、⁽²⁾安全保障の最後の拠り所になるのは、血縁だった。

もう一つ、流動性ということにも絡むが、中国では、封建制が早くに解体して中央集権的な郡県制へと移行する過程で、科挙制度が整備されたことを思い出してほしい。遅くとも1000年前の宋代までには、封建的な身分制に基づかない人材登用制度が整備され、いわば実力本位の社会が早くに出来上がった。そこでは個人が出発点となるので、身分の入れ物、「竹の節」のようなイエは必要なかった。個人を中心として、状況に応じて家族を拡張したり、縮小したりすればよかった。対照的に150年前まで封建制と身分制が続いていた日本では、家名、家業、家産が一体となった経営体のようなものとして家族が捉えられやすかったのである。

1990年代の終わり頃から2000年前後にかけて、いわゆる「農民工」が全国で出現した。内陸農村の津々浦々で、沿海部の大都市に向けての出稼ぎが普遍化し、大きな潮流となってきた。中国経済の高度成長が本格的に始まったことで、就業機会には事欠かない、売り手市場の状況が生まれた。農村では、家庭内で出稼ぎに行ける者が、行ける期間だけ都市に出て現金収入を得るスタイルが主流になった。

なぜ、大多数の家々の人々が出稼ぎに行ったのか？ 日本でもかつて、高度成長期までは、農村から大都市圏への出稼ぎがみられたが、中国の内陸部のような「村民総出稼ぎ」は主流ではなかった。村のなかで、経営耕地面積が小さい農家の方で出稼ぎ経験が多く、開始時期も早かったといわれる。つまり、誰もが出稼ぎを必要としたわけではない。

歴史的背景に家族主義の特徴を重ね合わせることで、この時期の中国農民の行動ロジックはかなりわかりやすくなる。このロジックを「家族

経済戦略」(family economic strategy)と呼んでみよう。この戦略は、簡単にいえば、世帯のなかの世代間分業を通じて、安定の確保と利益の最大化を同時に追求しようとするものだ。

まず、家族のなかの親世代、50代、60代の人たちは、各世帯に均分された小さな農地を経営している。この農地経営の第一目標は家族の安全と生存の確保である。少なくとも小さな農地を耕して自分たちの食料さえ作っておけば飢え死にすることはない。

いっぽうで家族のなかの子世代、30代、40代は何をするかというと、基本的には大都市に出稼ぎに出る。田舎にいて遊んでいても仕方がないからである。小さな農地の経営は親世代がやれば十分なので、学校を卒業した後の子世代は余剰労働力となる。

こうしてみれば、農民工の大量発生と1980年前後の農地平均分配措置との間には、大変、深い関連性があることに気付く。つまり、誰もが実家の農村に平均的な規模の土地を保有するからこそ、安心して出稼ぎにいくことができたのである。しかも「どんぐりの背比べ」からのスタートなので、「誰がどこでいくら稼いだ」のような情報が溢れ返ると、村内の身近な他人と競い合う心理も生まれる。

同時に、「出稼ぎ」が出稼ぎたるゆえんは、その移動が永久的なものではなく、季節的な回帰性をもつ点にある。つまり、大都市に出ていて終わりではない。旧正月や農繁期、老親の世話、あるいは出稼ぎを続けて現金が貯まり、家を新築する際に自ら建築作業に参加する際など、あらゆる機会に出稼ぎ者は帰省する。しばらくしてから再び出稼ぎにいか、あるいは実家に留まっているかの選択は非常にフレキシブルであ

る。こうして、農民は大都市と農村の間をぐるぐると循環しているのである。恒久的な「E」というよりは、人的な「F」の一部分と捉えた方がよい。

このような中国農民の強みは、2008年の世界金融危機で、都市の工場が操業停止や定員削減を行い、労働者が解雇された際にはつきり現れた。解雇された農民工は慌てることもなく、実家に帰って休息し、実家での農作業や用事をこなしつつ、淡々と次の出稼ぎに備え待機することができた。全体からみれば、世界金融危機は中国社会に何の混乱も生じさせなかった。

（田原史起『中国農村の現在——「14億分の10億」のリアル』より。原文の一部を省略した。）

問一 傍線部(1)「血の流れを絶やさない」ことにたいする執念は非常に強い」理由として、もっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は25。

- ① 血筋を絶やさないことによって、将来自分の家から役人となる人物が現れる可能性があるから。
- ② 血筋を絶やさずに引き継いでいくことが、家族において子孫が繁栄し、栄えることにつながるから。
- ③ 「血の流れ」が絶えると、外から養子を迎え入れる必要があるから。
- ④ 中国では、「血の流れ」と風水の「気の流れ」が密接に関係しているから。
- ⑤ 「血の流れ」を引き継いで、自分の家から役人を出すことが喜ばしいこととされているから。

問二 空欄 A ～ D に入ることばの組み合わせとして、もっとも適切なものを、次の ① ～ ⑥ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 26。

⑥	そして	実のところ	当然ながら	それでも
⑤	そして	ところが	実際に	とりわけ
④	そして	ところが	当然ながら	とりわけ
③	しかし	実のところ	実際に	それでも
②	しかし	実のところ	当然ながら	とりわけ
①	しかし	ところが	実際に	それでも
	A	B	C	D

問三 傍線部(2)「安全保障の最後の拠り所になるのは、血縁だった」理由について、もっとも適切なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 27。

- ① 中国では歴代戦乱が起ると、身一つで逃げるような状況が発生したから。
- ② 中国社会においては、地縁という空間的なつながりが重視されてこなかったから。
- ③ 中国は流動性の高い社会であり、安定的な地縁関係が常に失われていたから。
- ④ 中国は流動性の高い社会であり、地縁のつながりは永く続くものではなく、最後に信頼できるものが血縁であったから。
- ⑤ 中国において、地縁は恒久的なつながりではあったが、その最後のとりでとして血縁が存在していたから。

問四 傍線部(3)「農民工」の説明について、適切ではないものを、次の

① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 28。

① 中国の高度経済成長にともない、都市部での就業機会が増えたため出稼ぎにいく人々。

② 一定期間、農村から都市部へ出稼ぎに行って現金収入を得る人々。

③ 農村から都市へ出稼ぎに行き、そのまま都市に移住する人々。

④ 家を新築する場合には、都市部から農村に帰省して作業に参加することもある人々。

⑤ 都市部へ出稼ぎに行くが、定期的に農村へ帰省する人々。

問五 空欄 E に入る熟語で、もつとも適切なものを、次の ① ～

⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 29。

① 移転 ② 居住 ③ 移動 ④ 滞在 ⑤ 移住

問六 空欄 F に入る熟語で、もつとも適切なものを、次の ① ～

⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 30。

① 還流 ② 居住 ③ 滞在 ④ 滞留 ⑤ 逆流